特60
800

市村座狂言評判記

074751−000−6

特60−800

市村座狂言評判記

山田　仙魚／編

M16
CEK−0018

市村座評判記之序詞

人おの〳〵耳目を備ふされバ耳ハ聞き目に見る物に從つて多少の感覺を起さゝるゝおし故に故人劇場を發明して狂言を作り俳優と列ね善を勸め惡と懲すの景狀を呈すハ善惡邪正の人と出して看官の耳目を樂ましめ感覺を起させて聊か世益の端となすめり然バ千態萬情を演して看官を笑とせ看官を泣しめ又看官を樂ましむる等俳優が伎の巧拙ハ在ゝ勿論なれども又是作意の巧拙に因らざる事おしされバ吾儕さきに有喜世新聞の記者たりしころ紙上に評判記を載るごとハ必ずまづ作意の善惡を評し後ハ俳優の巧拙を評す此事當を得たる物おや今も新聞記者にして紙上に劇を評する毎に吾儕が筆意に倣ふも有りとか茲に朋友山田仙魚ゝ純粹の江戸ッ子にして幼稚より劇と好み江戸劇場の何たるを見おきらめ又評言も吾儕の筆意と仝うし今度市村座評判記一冊を編れり吾儕之を開き見るに彼田舍書生が近頃芝居を見初めし管見偏評聞取傍聞の愚論に非ず實ハ無私公明の評論あれバ看客ゝ此卷を開いて至れり盡せりを識たまへと序を

明治十六年五月　伊東橋塘記

特60
800

市村座狂言評判記

東都　伊東橋塘披閲
山田仙魚編輯

劇場を爲るに劇場らしきと嫌ひ殊更ハ實地らしく演するより皆劇場の趣きを失ふ故ハ滿場の見物ゝ面白からず只是欠伸の媒妁とあり日と追て客足の遠くありつ漸く日限まで〻興行し鼠狐〳〵にして場を了るの劇場近年其數いと多し然が中おゝ市村座が今度の狂言ゝ一番目中幕とも演劇中にて尤も屈指の時代狂言にして其趣向の奇ある妙なる實に故人の傑作あれバ遠く今人の及バざる面白味あり二番目ゝまた新作といへども河竹默阿彌翁が老練の奇筆にある物あれバ是きへ面白き思ひせられぬ故に日の長き重疊といふ可き五月廿一日より開場して連日夜に入て打出すの長劇場も毫も欠伸の出る事おし是狂言の筋の面白きと芝翫、菊五郎、團十郎などの上手が入て演すれバおらん編者が此狂言を見たるゝ實ハ五月廿七日にして此日ゝ二番目大詰の出るとて殊の外夜の更散場ゝ十二時ごろ〻らんといへるに好劇を以て自らをる編者も余りの事に堪り草臥穴切磯部屋敷の場中央ハて歸りたりしが夫ですら

早十一時に過たりける因てまた大詰を見たる後わが管見のまゝをかい附んと爲たる物から書房の爲に賣出しを急がるゝより其儘にして筆を採ぬ

一番目「橋供養梵字文覺」に臺詞、鬘、衣裝、小道具に少すも更あり草履、笠に至るまで渾て壽永年間の景狀を寫し中に餘程附會の所もあれど先感心と申す可し然るに橋供養の院本に異る所ろ二廉三廉あり序幕に祇園社の櫻狩にあらじて紅葉狩こそ本文なり又本文には紅葉狩の宗盛御所車の中にて熊野との色合ありて宗盛に車の中にて眠くなるを何處やら解らぬ奥庭にあし宗盛亭の中に眠りゐるといひ忠光の諫言に額堂にて宗盛を打おき頭の上に掲ある油坊主を押へる圖の御先祖忠盛卿が御折檻と言ねばあらぬところなるに忠光に弓よて宗盛を打ち此異弓に常陸の大掾國香云云と先祖代々より並べさせるに如何る譯の此橋供養の狂言中に胡蝶の内侍といふ者なし盛遠が袈裟の首を打て御身代りゐ立るに建禮門院とゐり然ばこそ亘法師重源が御供して西海へ趣くといふ臺詞もあるものなるべし然るに建禮門院といふ名を略さて胡蝶の内侍といへる者を出し是が役に代らしたるに其筋へ渾りたる同

堅の作者が注意といふべし編者つく〳〵此狂言を見るに序幕に花やかなる祇園の社を見せ二幕目に濱白ある橋供養あり三幕目忠光屋敷の場に生死流轉の愁嘆場にて四幕目衣川巷の場に此狂言の小圓圓にして盛遠と除くの外に大略其局を結ばせ而して盛遠が發心の端を開き置き大詰に至りて覺行および不動降臨の目覺し場を見せ斯幕毎に目先の變る耳あらず趣向も殊に勝れゐて最初に色氣あき爺さん姫さんに色氣を持せ夫婦にして橋の渡り染をさせ忠光、亘、盛遠の三家をあやつりて親族とあしおの〳〵義理ゐ迫らせたれば愁嘆場に一汐哀れゐ見えたり八劔平太を落武者の坊主ゐなし焔魔堂ゐて幽靈の可笑味を見せ是を種子として胡蝶の内侍の先を認め訴人のゝち盛遠に討せ其三衣と其まゝに着て文覺とあるを示も趣向あどい實に非凡ゐして感服の外あし然しあがら此狂言の主人公ともべき宗盛および熊野、朝顔、瀧人などの結局のあらぬに最見ぐるし中に就て四幕目那智黒伴吾が袈裟御前の首を盛遠より受取歸るところ「僞と白木の首桶」云云といふ床の淨瑠璃あるにも拘らず伴吾に袖に包たるまゝ首を持返るに惡からん又那智山の場大薩摩の歌の中に「ひみや

う、ほうろん、こくうどうたい、右あ劔、左りにらせつの縛、しん〳〵の衆生」云云との文句あるハそも〳〵何の事ぞや編者想ふゑ這ハ是れ佛説聖不動經の中ある「大智惠の故に大火焔を現じ大智劍を執て貪瞋痴を害し三昧の索を持して難伏の者を縛す無相法身虛空同體なれバ其住處無し但し衆生心想の中に住す「云云と不動の當体を説たる經文を聞はつりて斯る聞ぐるしき文を作り出しあまつさへ羅刹などゝいふ言葉さへあれと羅刹ハ則ち十人ありて是を十羅刹女といひ事ハ法華經卷の八第二十六品目ある陀羅尼品に在ものあると茲へ引出すこそ可笑けれ然して此一番目の道具の惡さこと甚だしく實あ宮地芝居を見るが如き思ひわり且大誥那智山の塲あどハ一ハ道具を以て見せる程あると作り附の瀧毫も廻らずせり降しせり上らんとする道具あぐも一々黑幕を降す程あれバ肝腎ある塲も見樂あさと覺えたり

第一番目 **橋供養梵字文覺**

序幕　祇園社櫻狩の塲　二幕目　渡邊橋供養の塲
三幕目　富小路屋舗の塲　四幕目　鳥羽堤辻堂の塲
同　同　衣川住家の塲　五幕目　那智山瀧籠の塲

嵐璃寛　渡邊左衛門亘ハ艶麗ある可き人ある

と此丈あてハ年のふけ過て到底その當を得ざる役ゆゑ當人も餘り身に入れてせざるにや近頃になき不出來と思われたり渡邊橋の塲にて女房袈裟がとる〳〵と尋來りしゑも擇ハず毫も寞ぶ景狀あく色合の所ろも色氣ありれバ物足ぬ心地せられ此所ハ袈裟を普請小屋にて一晩泊やうといふ位ゐあれバ尋來りしを喜び充分に色氣あつてよし鳥羽里の塲ゑ萌黃の狩衣を着たる景狀ハ神官にやと疑われ北面の武士と思ハれざるあり茲ハまた袈裟に會んとして我方から尋來りしなれバ一層色氣を含み憲の中に決別を告る慇懃たつぷりと有たし臺詞の中に「二星の星」云云とあるハ作者の不注意か當人の出たらめか盛嬢が袈裟の首とうち胡蝶の内侍の御首といふを聞て一間より出來る所ろハ太く驚き周章出る方ある可きに然ハあくして徐々と出來る耳ゐ前に「閨房あたゝめて待てゐん」と臺詞あつて這入あれバ亘ハ已に寐たる者にて寐たるものが此聲を聞て起て來あれバ素のまゝの姿にてハ惡ーこゝハ寐衣姿にて押取刀たる可きあり盛遠に討れしと思ふ内侍ハ無事にして奥より出來り身代りハ女房袈裟と心附たらバ且驚

き且嘆く可き所あるを然もあさい實に見棄なし富小路の場の猪熊左近い別に評あし

片岡我童　長井の齋藤五い那智山の場にて初め

禮と厚くし爲久に乞て六代に見んことを望むも後に本名を名乗て憤激する所ろも毫も氣味合變らず遂だ不出來の方といふべし立廻りい毎あがら生硬くして東京の見物の氣にい入らず文覺が捨身せしゐとへ來り瀧壺を見下し「今一足早くんば」といふて止めざると遺憾とせし臺詞の末に「殘念やる口惜」やあといひあがら向ふを白眼で見得をするい何の事ぞや第一殘念口惜しといふ臺詞も悪くろい飽までも文覺の死を悲嘆必得でせざれがならざるふ其心持い毫もなく白眼飲して場當りを好どい困つた物あり

河原崎國太郎　宗盛の乳母衣川祇園社にて

盲目の場い彼樂な役い目下此人の外よ演ていあく地体色氣のあさ女形なれば反てつよろしく見え鳥羽の里の場よて胡蝶の内侍を救ひ我家へ連歸り戸棚へ隠し置き盛遠に憲見をするより同人ふ迫られて困とる所ろ袈裟が操を破ると き、夫を悲ひ所ろあど都て寸し分あさ出來あり忠光の女房御町富小路の場にて八劔平太を威す所ろい天晴五郎兵衛の妻と見受ましたが我子の横死本夫の負傷と見ての驚嘆愁傷い餘り少くして人情あき女房かと思いれたり

岩井松之助　當春春木座の江島以來水さわ立て上

達され宗盛の妾熊野(後前い美麗く仕種も中々上出來あれど惜いかあ未だ年功の積ざる故か祇園の社の場にて朝顔に彌人を取持ところ今少し功者にやつて貰ひたし盛遠の妻かとる富小路の場よていい離縁を受て歸り親見の死別ふ會ふ場あれば終始愁ひたつぷりに在れば成らざるもの成るを愁ひの少さい惜き事あり鳥羽の里にて追手と相手ふ負傷とありて烈しく立廻りとい氣を失ふひ倒るゝまで非常の上出來よて烈しき中にも女の氣韻を失いず負傷の爲に段々と面色代り倒るゝ所ろあどい感心しさり而して番匠喜作に呼生られ氣が附ども我手疵を省ず内侍の安危を案じる仕打實に觀客を感じさせました

中村相藏　農夫念佛作次序幕祇園の社の場よ

て女房を持しと渡邊橋渡り染の事を娘朝顔ふ話も長臺詞い此狂言の大意を知せる種子あれば尤も大切ある臺詞あるを得了老功だなふ落附て能くのべ衣裳仕種ともによろし

嵐璃丈

中村時五郎　那智黒判吾ハ評する所もあし
左大將重虎ハ有に甲斐あさ者あり

市川新造　侍女朝顔ハ奇麗なれど仕種の足らざると無理に女よ成らんとて女の假聲を遣ふハ悪し獵人よ會てよりハモウ一層色氣を持たし

中村芝翫　内大臣宗盛ハ仕種衣裳とも萬事愚將らしくして能けれど遠藤將監持遠ハ顔のこしらへ風もきて悪し渡邊橋の場にて悴盛遠の呼返と止め亘その他を遠て遣入所ろハ如何も義に強き人と思ハるれど悪きおがらも盛遠ハ實子なれバ毫ハあわれむ所ろ有ても能からん富小路の場へ出て來る衣裳ハ人丸の神像かと見紛ふ計りにして悪しまた如何親族といハへど嫁かをるを歸せバ忠光ハ他人あり聲へ腹の中ハ如何あるも表向他人の家へ鎧櫃を持來り鎧を着し家來もあく其所より出陣するハとかし殊に渡湧橋の奉行たりしも急を聞と其まゝ我子も見返らず直ち物の具して馳登りし物が合戰を暫し余所ゐして嫁を返しにゆき附てハ衣類と着代るあど餘り優長ある事にて同じあがら茲ハ鎧のまゝにて薫を返しに來たる方能かるべし是等ハ作者の悪きなれど當人もまた不注意といふ

可し貧僧ゐ成て出來りても差たる事ゐし制吒迦童子ハ評する所もあしといへども文覺を助んといふて見えをするハ悪し鬼ハ役ハ重々しく餘り動ぬ方能からん

中村福助　胡蝶の内侍ハ衣裳あども能けれど如何にも品格に乏し

市川金太郎　惟盛の嫡男六代那智山にて文覺に救るゝ所ろさしたる事ゐしと雖も爲久が再度寄來よし齋藤六の物語を聞ところと文覺が二個の兵士を誤つて殺し瀧壺へ投身せんとするを聞案じる所ろハ五分も隙あし

市川枇杷丸　忠光の一子光若可愛らし

中村歌女之丞　侍女松が枝橋供養の場および鳥羽の里の場とも能く出來殊に橋供養の場にて袈裟と亘を會せる迄の所ろハ中々達者に仕て退たり奥女中櫛みハ別に評あし

中村翫太郎　關原兵内達者〳〵鳥羽の里の場辻堂前の可笑味より薫との立廻り中々能し

市川猿十郎　八劔平太ハ充分に道化る氣あるかも計られねど萬事重くるしく可笑くらず富小路へ上使に來

り國町に追返さるゝ所ろゝ少く能出來たれど二度目に內侍を連て來り注進あり落武者と成んとて歸る所あどゝ不出來もまた甚だし鳥羽の里閻魔堂の塲僧侶の扮担ゝ何處ともあく身体の容り過て俄道心とゝ見ゑず而して幽靈の假聲を遣ひ追手を威すところなどゝ皆無見られずといふて可ならん

澤村納子　多田藏人行綱祇園の社の塲朝顏の事

と熊野より聞てよりゝ今少し態さありてよし一体此役ゝ充分色氣と持優男にてゆくかたよろし長井の齋藤六如何も猛く見え大諸那智山の塲の立廻りあども烈敵して天晴手練と見受るより

市川壽美藏　番匠喜作渡邊橋の塲よて幕明舞の手振ゝ可もなく不可もあし盛遠を介抱するところ活を入るゝ武士樂て能くあし茲ゝ何處までも職人らしく呼生る方よし夫より行んとする盛遠と止る所ろゝ實直にして能し鳥羽の里の塲にて太刀を佩出るゝ惡く茲にてもまた薫を介抱するに活を入るゝ蒼蠅も見ぐるしく都て此役ゝ出來能しからぬ方にて本名のある大工にやと思ゝるゝあり石田爲久ゝ別に評なし

市川團十郎　上總五郎兵衛忠光序幕祇園の社にて宗盛へ諫言の塲ゝ天晴大忠臣の志操を顯し能く爲たり富の小路にて病人のこしらへ出て持遠よあふより切腹まで

の仕打先づ難あき方なれども市川團十郎といふ名前にしてゝ隨分と不出來の方なるべし第一初の衣裝と髭の容子にてゝ賣卜者の景狀あり此所ろの大慾嘆塲も殘らず氣味合にて見せたきゞ知人こそ知るかも知れねど到底劇塲の氣を失せしより面白からずして欠伸を催しぬ遠藤武者盛遠ゝ流石に本役だけありて忠光の如き比ひにあらぎ然しあがら衣裝の餘りに麁末なるゝ此丈が例の探古辟にて是また劇塲の心を失ひ見榮あきを惜むあり橋供養の塲にて黑塗の丸下駄に白柔皮の鼻緒をすげたるを穿しゝ惡からん茲ゝ金剛草履たる可し嘗へ本心にあらずと雖も父の勘當も怖れざる程なれゞ袈裟を口說ところモウ一層色氣ある方能からん氣を失ひて喜作の介抱を受け心附て四邊をつゆくり見廻し何にも言ず駈出す所ろを止られ船と陸との二筋道と聞馳戻つて橋の欄干へ足を踏掛向ふを見渡して幕を切まで無比の大出來且始終肚ど押へてゐる注意ゝ妙にて言葉を出さずして見物にゝ執心深き情判然と見え

たり茲等が團十郎の團十郎たる所ゐるへし鳥羽の庵へ來るところ夜中に笠を冠るゝ惡し是も落人なれば世と忍ぶため然もあるべけれど當時源家に從ひし盛遠あれば憚る所ろ毫もあし本心を明しての物語りゝ愁ひ充分にして思ゝず袖を濡させたり大詰那智山の塲文覺の衣裳鼠の着物、黑の衣の汚れ破れたるを着たるゝ實地を示す積りかゝ知ねど見樂あくして坊界坊と間違へらるゝあり是ゝ最初より八劔法師に白の着物と着せ夫と取て黑の衣と共ゑ着たるあらば見樂もありて能しからん仕種ゝ六代を救ま

で温順にして追手ゑ迫られ二個を相手に立廻りとゝ誤つて殺すところあどゝ再度勇士の形相顯れでよし後に非を悔て瀧壺へ身を投ずるゝ眞言の荒行者を眞にみるが如く又瀧に打上られ遂に不動の姿を拜し臺詞なくして兩手を合せ幕を切あどゝ此丈が爲意の藝なるべし不動ゝ其形とうも注意して能く拵へたれど別に評する所ろもあく能く言ば成田屋のお家物と稱賛すれど惡口を言さば贔家感に過ずといいんか

助高屋高助　　賀茂は前ゝ衣裳その他も餘程注意したる樣に想ゝるとど品格の乏しさと本分あがら臺詞の足

の速さに因りて世話女房の方へ近く先不出來の方と言すべし橋供養の塲ゝ別ゐ評そる所ろあけれど鳥羽の里の塲にて盛遠に迫られ言事と聞といふて意の中に死を決する所ろゝもう一層深く考へ悲みの情を外表に顯す方よかるべし豆と酒宴の中は始終愁ひありて能かりしが豆が寐たるゐと緒環の糸を張る所ゐ到りてはどや悲みを忘れたるが如くなるゝ惡し富の小路の塲の遊倉右近は太功記十次郎の影法師を見るやうな役にしてこの丈ゑゝ適當といひ而も儲け役あれば目立てよく見ゑたり那智山の塲の狩羽羅童子ゝ其形能けれども臺詞廻し意氣ゐして餘りに安つぽし

中幕「平假名盛衰記」逆櫓の塲と梅が枝無間の塲ゝ是も同く有名ある時代狂言にて旦つ度々演して世の人のみあ能く知る所ろあれば此度の筋にも改正したる所ろあれども冗長しければ敢て言ねど逆櫓の松の塲ゝ毎の如く實忠を出し鯉口の結局を見せたる方よからん如何兼光が眼目の人たりとて見るもの一個ゐてゝ寂しきを覺えさり無間の塲ゝ狂言を見せるに非ずして梅が枝を見せるあれば言ば筋ゝ如何でもよき物あり

嵐璃寛　人形遣ひ西川伊四郎ゝ和三郎の人形身を遣ふ故か骨折ゝ澤山見えたり然し掛聲の少きゝ如何にや充分ゝ掛聲ありたらバ人形もいよ〳〵眞に迫る可きを船頭富藏ゝ鳥渡輕く出來たり

片岡我童　船頭又六思ひ切て顏を赤くしたるゝ大出來ゝり人形身の左り遣ひゝ能し

河原崎國太郎　侍女ゝ筆ゝ上出來の方にて櫂四郎親子に禮を言れ土松が事を言出し兼るより後ゝ思ひ切といふて饒舌ところ又樋口に會て駒若を抱き上坐に直りて自然見識のゝるところゝど斯る役を斯まで能ゝし得るもの目下東京ゝ此丈の外ゝゝ有らざるべし

岩井松之助　松右衛門の女房ゝ芳ゝ芝翫、團十郎、國太郎の中ゝはさまりての女房役ゆゑゝ如何にやと思ひたりしが存外の上出來にて櫂四郎ゝ仕る所ゝの優し氣ゝ筆に禮をいふ所ゝの一寸可笑味ゝる後に愁嘆も澤山ゝり初より終まで毫も欠たる所ゝく實に恐れ入たる未頗毋しい女形であります

中村相藏　亭主ゝ本方の役なり

嵐璃丈　人形遣ひの足柏子大義千萬

市川新造　幇間頓八出しのみ

中村芝翫　船頭松右衛門實ゝ樋口の次郎兼光ゝ此丈が亡父讓りの得意の狂言ゝして今迄度々演しをれバ毫も評を下すに及バず芝翫が松右衛門をするにゝらずして松右衛門が松右衛門を演るとゆさんのみ

市川枕杷丸　駒若丸ゝ品格ゝし

澤村訥子　船頭九郎作ゝゝ交際

嵐和三郎　編者觀劇の僻ゝるより是まで人形身の芝居を多く見たれども子役の人形身ゝ初てにて又是ほど上手に演する人形身を見たるも初てゝり此丈が此度の梅が枝ゝ蓋し父璃寛の敎ゝ因るか知らざれど空前絶後古今未曾有の上出來にてさしも長き一幕の間眼を動さず目バたきをせざる所ゝに至りてゝ實に凡人にゝ非るかと思ゝるゝ計りにて身体のこゝし首の動し方手先の指の容子ゝどゝ只眞に迫りて見物ゝ手に持物と落すを忘れ擧るゝ聲も出ざる程ゝり若し未だ和三郎の俳優さる和三郎の人形身たるを知ざる者ゝ此梅が枝を見せゝバ誰か生て動

く人間と思ふ者ある可き後生恐るべき俳優中の麒麟兒あるりけり

市川團十郎

船頭權四郎ハ攝州福島の船頭とハ見えず江戸俠客の風ありて夏祭の三ぶにハあらざるやと思ふ計りあり然し仕理ハ得了此丈だけありて萬事抜目あく土松の音信を聞て喜び禮といふ可笑味ハ輕くしてよく後ゑ死せるを聞て暫らく首葉あく屏風を見せてお筆に向ひ述懷の段ハ眞に迫り殊更に能く出來たり

二番目「新皿屋敷月雨暈」ハ前にも述るが如く河竹翁の新作あれバ开が趣向の新奇あるを見んとて大詰前までハねたりしが餘りゑ夜の更たるを見果ずに歸りたる故其結局如何ハ知ねど紋三郎が廻狀を得て五太夫の謀反を訴へ惣五郎が磯部の屋敷へ暴れ込て妹の怨と訴ふるに因れバ蓋し之ゑて結局の思ひ中半に過たり殊に河竹翁が作あれバ人物をして途中ゑて立消させる等の不手添ハ万有べからずと保証すれバ結局の筋ハ首ずして今見たる丈の作意を表せんそもく此狂言ハ新皿屋敷と外題を置たる丈に彼お菊の事に髣髴たるハ然も有る可き事あり然して序幕ゑ菊茶屋を出して冥々裏にお菊の事跡に縁ある話しを見せ其處よりお蔦の素性および磯部の妾とありたる來由を聞せ磯部屋敷の塲ゑて五太夫が謀反の密談を示してお蔦が非業に死そる原因を顯し歸り來る主計之助が殿中の景況を語りて酒乱短氣の生質と説ク加ふるにお蔦を思ふの言葉を述させ後ゑ手討ゑする時の觀染としさるハ簡短にして能く盡したる作者の妙といふ可し然しながら菊茶屋にてお藷がお蔦より貰ひたる髮插の折氣にする所ろありて後に部屋の塲にて又櫛并を紀念に貰ふ筋あるハ重復する樣あれバ茲ハ着物か何かを紀念にやりたる方能かるべしお蔦ハ飼猫と尋に出で辨天堂にて無寶の罪ゑ陷入り其飼猫ハ後に廻狀を喰へ來りて紋三郎に與ふるなど猫を二度まで遣ふも能けれども主任の俳優が菊五郎丈に此猫に何か因縁ある樣に思はれて悪し希くハ猫と癪ゑ辨天堂へゑ參りとあし暗闇にて典藏が落したる廻狀ハ其まゝにあしおき後にお蔦の幽靈が紋三郎の死を止め此廻狀を渡しあバ紋三郎も幽靈に止ゑられたる甲斐ありといひお蔦も五太夫の悪事を告あがら証據充分にして是も幽靈に出たる甲斐ありといふ可し此時幸ひ猫が廻狀を持て來たれバこそ能けれ若し左なくバ五太夫の悪事を知とも夢に等

き幽靈の言葉のみにて訴へ出るゝ道あからんとい言へ此廻狀も惡人を退治する足にならぬ物と思ふが如何にやお蔦部屋の塲い鏡山の尾上の部屋に似たる所ろにてお蔦お瀧の愁嘆あれゞ澤山あるに有ずもがあゝる梅次といふ小姓を殊更に捻り出したるが爲め狂言の筋を損じ反りて見物の飽を來したりお蔦部屋の塲にて櫛笄をお瀧に與ふるをり床の淨瑠璃の文句に「紀念の櫛や笄ゝ浮いあけれど身も浮計り」云云とあるい能き文句あり茲お冗あるものい浦戸兄弟を殺さんとて道庵が盛し毒藥ゝて其筋を聞せ其用る所ゝ困りしより到底死するお蔦に飲せ試みしゝ止る成る可けれゞ設し夫あれゞ浦戸兄弟とあき者にせんとする筋い他の事にしたる方能らんか此二番目い一番目お異り道具い余程宜敷方あるがお蔦の部屋い一間の中に主從雜居の姿にて僅お納戸ある耳あるい時めく大名の妾にして殊に茶の湯を好ゝ風呂あどと据たるにい似ず小格子の娼妓の部屋ゝきたり紋三郎の家の塲にて正面へ黑地に水に柳の唐紙を嵌め幽靈を寫せる趣向い能やうあれども是にてい最初より幽靈の出る所い彼所あらんと思いれて惡し幽靈あどい思ひ設けぬ所ろより出されゞ看客の喝采い得られぬ物あれゞ幽靈が出るゝい是非とも柳があけれゞ成らぬといふ舊習を離れ此唐紙を月影おでもあしおゞ反つて喝采を得ること有べし三幕目魚屋の塲ふてお蔦の不幸ありしゝ依り神棚へ白紙を張たる道具い感心〳〵

嵐璃寛　浦戸重左衛門ふけたる扮担より弟に異見をする所ろ萬事扳目あく能といへども此役い茲といつて見せる所ろもあく至つて損なる役なり

片岡我童　磯部主計之助斯る役い如何にやと思ひとりしに言語動靜とも其當を得てよろし屋敷の塲にて殿中の不平と心に持ち歸り來る所ろ庭の塲にて典藏兄弟の讒言と酒氣と帶て怒り激しくといお蔦を殺す所ろまで如何にも酒乱らしく能くあしたり此丈が今度の此役い近頃の大出來といふべし浦戸紋三郎もまづ可成の出來なり

河原崎國太郎　宗五郎の女房お濱ヤし分なし

岩井松之助　一番目のかをる中幕のお由とも前に評するが如く黑上々吉の出來なれど又一層の上出來といふい此二番目のお瀧の役にして是い鏡山のお初を燒直したる役なれゞ隨分とひづりしきにも抱らず如何も主人思

ひにして實体らしく一擧一動間髪を入る可き程の原もあき無類の上出來にて菊茶屋の場にて主人より貰ひしかうがひの折るを楽しる仕打部屋の場にて主人の無實を聞別れを惜みての愁嘆至れり盡せり菊五郎如何上手といいへ松之助のお藷あらざれゞ其場の愁嘆あれほどにい行さる可し實にお藷あつてお蔦の愁と出し藷場の看客を泣しむるあらん魚屋の場にて我持來りし酒より宗五郎の酒乱とあると見て氣の毒がる思入あどい他の及ばざる出來にて昨年來京坂地にて修行の功見え藝道熟心の大和屋丈此分で行たら遠からずして檜三枚の立お山い編者が急度保證ます

中村相藏　醫師濱田道庵い別お評なし

尾上登美松　追て名代に登るとかいふ丈ありて菊茶屋の女房お光よく出來たり

尾上菊之助　小姓梅次い前の作評にもあるが如く此狂言に不用の人物にて出る幕あらぬ所ろへ再度までも邪魔に出他の俳優の狂言の妨げに成りて看客の目障りよ成る役ゆゑ音聲も伎藝も殊の外悪く見ゑたり

尾上菊五郎　磯部の妾お蔦い此狂言の眼目とする役ゆゑまつ難あき方なれども悪人らしく見えて高橋お傳が出世したる物にい有らざるやと思ふ計りあり部屋の場の愁嘆い好しといへども殿の使ひの武士を待せ置き其處で着物を着代るい至極わるし庭の場にて責打れし苦みと毒藥の廻つての苦しみと合せし休い中々能し殊に主計に切下られて眞さかさまに井戸へ落入ところい如何も手際にして看客の目と驚かしたり幽靈いお家者とてやし分あけれど踊るが如き姿を障子へ寫すい可笑浦戸の宅の幽靈い餘り口を利過るゆゑ毫も幽靈らしくあし是い仕打にて見せ紋三郎のこわ口を利せたる方よからん魚屋宗五郎い衣裝その他とも此丈適當の役ゆゑ徹頭徹尾やし分あき上出來殊に家の場よて片口より酒を飲こ其中へ紅を仕掛顔へ塗て醉を示も所ろなどい斯樣あ事い目下此丈の外お蔦人いあく芝居として活歴史とする馬鹿者と除くの外い大受あり夫より暴行出す所ろより玄關前にて醉中の立廻りあどい奇々妙々といふべし

尾上松助　岩上典獄の役い中々能くこあせしと雖もお蔦と責る所ろあどい以前新富座で演せし皿屋敷の忠太の形わりて悪し是い忠太と撰せし役あれゞ忠太を離

れて爲たきものあり

澤村訥子　浦戸の若黨左市別に評あし

市川壽美藏　魚屋太兵衛い中々の能き出來あれども年齢もこしらへも仕種も是に髣髴たる團十郎の權四郎中幕に在る其あとなれバ毫も目よ立ず遺憾の事にて有たりと先い此丈の評を以て終とす

編者いふ吾儕が此狂言を見たるい未だ出揃いざる中に一度見たる耳といひ筆記も至急を要するが故に僅十時間に書了りし物なれバ誤見もあるべし誤脫もあるべし又印刷校正とうも火急わあさしゝ事あれバ是また誤りあきを保せず看客幸ひよ冷海容あれ

明治十六年五月廿九日筆記

市村座狂言評判記了り

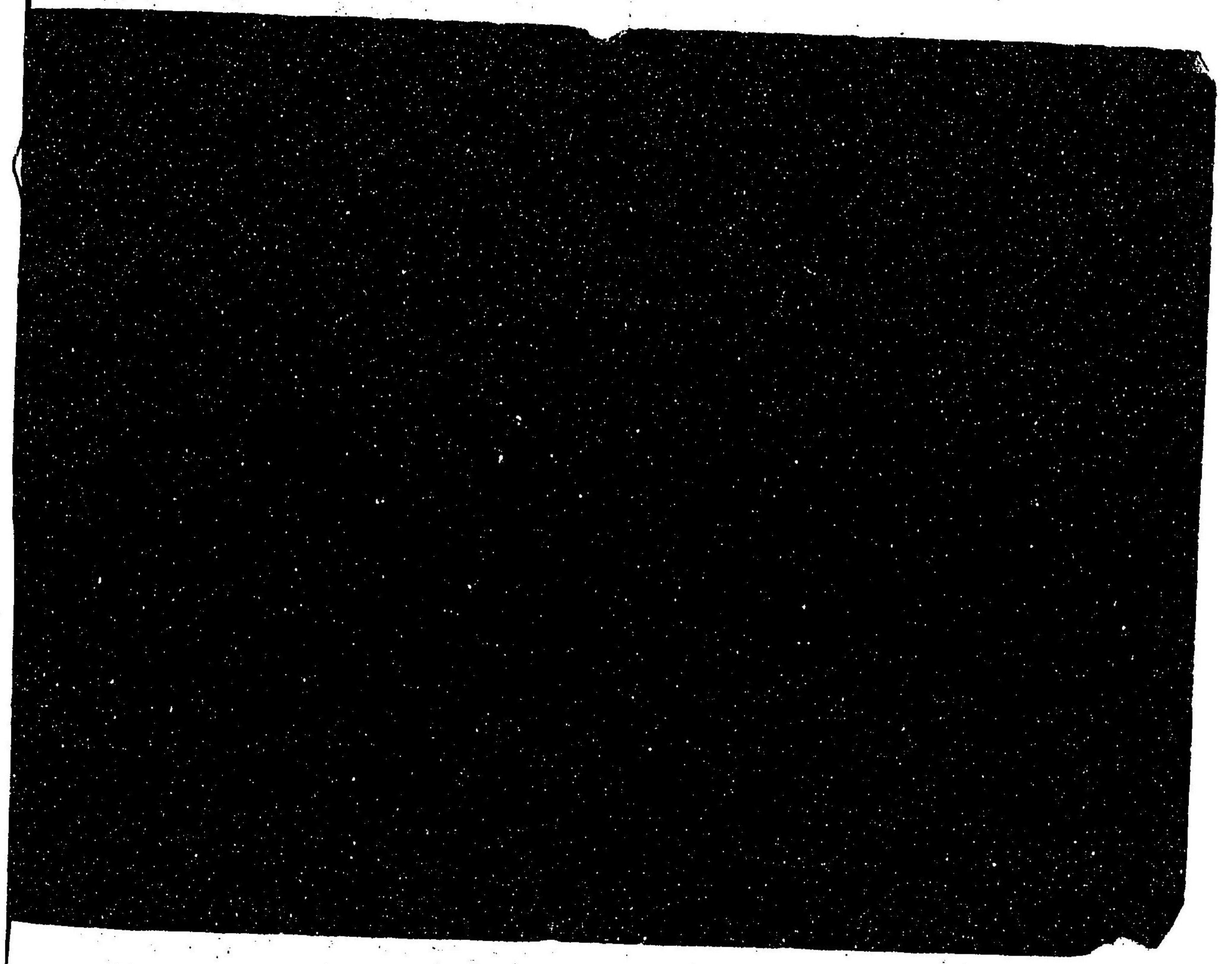
明治十六年六月九日御届
同　六月十日出版　（定價六錢五厘）

編輯兼出版人　東京府平民　山田伊之助　日本橋區品川町九番地

發賣元　滑稽堂　日本橋區室町三丁目九番地

出版廣告

伊東橋塘編輯　大蘇芳年畫圖

花春時相政　前後二冊　初編　六月十五日賣出シ

本編い看客諸君ハ山の如く注文に預りし明治俠客箱屋町相政老人の傳にして伊東先生が得意の書物大蘇氏が年來の馴染によりて卷中の人物い殘らず寫生よして通情の讀本とい自から異れり弊舗幸ひに兩先生とい知己よより所謂親類交際の故を以て畢生の妙筆を揮れ彫刷ともに緻密に致したるわ據り大きよ出版の期に遇れ府内及各地方ハも續々とに督促も累積致し恐縮の次第に有之し處漸く發賣に至れバ陸續に購覽の程偏に希ふ　板元敬白